

武満徹のパウル・クレー絵画と音楽

石野 眞

Makoto ISHINO

A Study of Music on Paul Klee's Paintings by Toru Takemitsu

キーワード：パウル・クレー Paul Klee
武満徹 Toru Takemitsu
音楽 Music,
絵画 Paintings
アレキサンダー・クレー Alexander Klee
クレー・プリミティブ Paul Klee's Primitive

I. はじめに

さきに、拙論「パウル・クレーのプリミティブ」－平成9年12月・島根大学教育学部紀要・第31巻（人文・社会科学編）において、パウル・クレーの造形思考と造形表現における「プリミティブ」について研究した。先稿では、浜田市世界子ども美術館創作活動館の開館ならびに開館記念展『こどもたちのパウル・クレー展』の意義について述べるとともに同展に寄せてアレキサンダー・クレー氏が祖父パウル・クレーの造形表現について述べた講演に基づいて、パウル・クレーの造形思考と造形表現にあるプリミティブ性「パウル・クレー・プリミティブ」について研究した。

本稿では、武満徹氏のパウル・クレー論、その絵画と音楽について考察する。

武満徹氏はパウル・クレーの作品に接して、昭和25年、20歳のとき瀧口修造氏の口添えで美術雑誌『アトリエ』に執筆（月刊誌「アトリエ」1951年／昭和26年6月号）パウル・クレー論を書き、初めて稿料を得た。相前後して初期創作作品の代表となる「二つのレント」が発表されている。

本稿では、武満徹氏の創作活動初期に流れるパウル・クレーへの傾倒、作曲と絵画性、その曙光について留意し考察、研究する。

なお、「パウル・クレー」の表記について、武満徹氏は「パウル・クレエ」と記述しているので武満徹氏の引用文では、そのまま「パウル・クレエ」と記述し、その

他については、今までの拙論表記のとおり「パウル・クレー」と表記する。以下敬称を略す。

II. 武満徹のパウル・クレー論

武満徹は、「パウル・クレエと音楽」と題して、クレーの二つの絵画作品「AD MARGINEM」及び「空間にて」に寄せて書いた。

二つの絵画作品「AD MARGINEM」バーゼル美術館所蔵及び「空間にて」ベルン美術館所蔵の作品記載図書の主なもの、次のとおりである。

*Paul Klee im Kunstmuseum Bern / 1940

Schwebendes. 1930 (Nr. 143)

Oel auf Leinwand. -H84cm, B84cm. -OK 1930 Nr 220 (mit dem Titel: <Schwebendes> vor dem Anstieg. -K

*「クレー」ヴィル・グローマン（井村陽一訳）世界の巨匠シリーズ・美術出版社1992. 原著 Will Grohmann, Paul Klee, New York, 1967

「AD MARGINEM」バーゼル美術館所蔵

「空間にて」ベルン美術館所蔵

*Paul Klee Das bildnerische

Denken Herausgegeben und bearbeitet von Jurg Spiller / Schwabe & Co. Verlag Basel / Stuttgart 1930 / e10 und 1935 / 36 ad marginem (an den Radgeschurieben). Tafelbild

1930 / s10 : Schwebendes vor dem Anstieg. Oel

auf Leinwand.<Koerperlich-raumlich-transparent.>

*Paul Klee Notebooks Volumel the thinking eye
Edted by Jurg Spiller / Translated by Ralph Man-
heim / Lund Humphries, London / First English
edition 1961

1930 / e10 : ad marginem (in the margin) Oil.

1930 / s10 : Hovering befor rising Oilon canvas.
three-dimensional body, transparent.

*造形思考(上) パウル・クレエ / 土方定一・菊盛英夫
・坂崎乙郎共訳 / 新潮社1973

「アド・マルギネム」バーゼル美術館所蔵120頁

「空間にて」ベルン美術館所蔵228頁

*クレエ / 作品解説・大岡信・「幻想と覚醒—クレエの
人と作品・新潮美術文庫50・1985・新潮社

19「アド・マルギネム」バーゼル美術館所蔵

*現代世界の美術13クレエ・編集委員・中山公男・東野
芳明・大岡信 / 責任編集千束伸行 / 執筆者千束伸行・
浅田彰・集英社

39「アド・マルギネム」バーゼル美術館所蔵

武満徹は、「パウル・クレエと音楽」と題して、美術
雑誌『アトリエ』に執筆

『“AD MARGINEM”効果あるピアノシモ』の文章
ではじまり『AD MARGINEMの日没時。クレエは静
かに、微笑しながら明日を予言する作家です。(たけみ
つ・とおる 作曲家)』としめくくっている。

昭和26年 / 21歳の武満徹は作品「二つのレント」が藤
田晴子の演奏で、NHKラジオ「現代日本」の時間で初
めて放送された年でもある。

武満徹は『言葉の杖によって思索の歩みをすすめる』
と言っているようにあらゆる創作活動において言葉は重
要な意味を持っている。そしてまた、パウル・クレエの
美術作品にも同じように重要な意味を持っている。

アメリカの作曲家ラファエル・モステルは、『美しい』
という形容詞を20世紀の作曲家に捧げたくなることはあ
まりないけれども、武満徹の音楽に関しては、この言葉
がおおむね妥当なものとしてあてはまる。—

むしろ彼は、自己の内面の奥底を探りながら、そこに
横たわる「夢の庭」を音楽という形で描き出してきたの
である』。と述べている。—「夢の庭」ラファエル・モ
ステル / 訳・木幡一誠。と述べている。

武満徹の音楽における創作活動の初期にパウル・ク
レーがいることに注目したい。武満徹が度々、パウル・
クレエについて記し、語っている中にパウル・クレエの
創作活動を愛し、親しみ、心に深く留めている様子が窺

える。

武満徹がパウル・クレエの作品に寄せて、昭和25年、
月刊誌「アトリエ」6月号にポール・クレエ論を書いた
経緯は、つぎのとおりである。

*『1950 = 昭和25年 / 20歳

「ポール / クレー論」を瀧口修造の口添えて美術雑誌
『アトリエ』に執筆。初めて原稿料を手にする。

—武満徹・年譜 / 秋山邦晴編』*

*『1951 = 昭和26年 / 21歳 [5月31日] 新作曲派協会
第8回作品発表会。瀧口修造の詩画集「妖精の距離
に触発されて作曲した同名のピアノ曲を発表。瀧口
の口添えて美術雑誌『アトリエ』に執筆初めての原
稿料を得る。—武満徹年譜 / 小野光子編*

*『1950 = 昭和25年 / 20歳

師清瀬保二や松平瀬瀬則、早坂文雄らのグループ「新
作曲派協会」に入会、同会の第7回作品発表会にピ
アノ曲『二つのレント』を発表しデビュー。この年の末
頃から、劇団「四季」の女優であった若山浅香と親し
くつき合う。—秋山邦晴の年譜を船山隆・渋谷政子が
増補改訂した / 467頁

武満徹著作集5・新潮社2000・7・10

以下の考察と研究に際して、『…』として武満徹の記
述を引用する。

Ⅲ. 「パウル・クレエと音楽」—武満徹に おけるパウル・クレエの絵画と音楽

武満徹作品に見られる静謐な「効果あるピアノシモ」
がここにはじまっている。武満徹におけるパウル・ク
レーの音楽と美術の共鳴が作品「アド・マルギネム」に
静かに響き渡っている。『奇妙な音階が同時にヴァイブ
レーションを起こしたような。それもピアノシモで』…

パウル・クレエの絵画を見る武満徹の眼には、武満徹
の音楽作品に見られる音楽と美術の共鳴が『言葉の杖に
よって思索の歩みをすすめる』かのように語られている。
『その一音一音は美しく、ニュアンスに富んでいます。
震えているような線は、しかし素晴らしいフーガに何時
しか変わります。クレエの作品は、音楽が人を魅するの
に似た、魔力があるように思われます。』

その言葉は、

『私は音に色彩があるように、色の中にも音が潜んでい
るものと思っています。』

『クレエは作品の中で、つつましくやかに音楽と絵画を結びつけたようです。』として語られている。

少年時代からバイオリンを良くし、生涯に渡って音楽を愛したパウル・クレエの表現世界は音楽とともにあった。

『“AD MARGINEM”効果あるピアノシモ。

この作品を前にして、たしかエドガー・ポーの〈沈黙〉という表題の短編、その中に描かれている、悪魔の呪詛を蒙ったリビアのゼイル河の不思議な状景を思い出しました。月は、中空でよろめかず、雷鳴は消え、電光も閃かず、雲はじっと動かずに凝り固まり、水も平静に収まったままで、樹も揺るがなくなり、睡蓮も溜息をつかず、ひろい荒野には囁きも物音の気配としてない—奇妙な音階が同時にヴァイブレーションを起こしたような。それもピアノシモで—

美術は目に見えるものを、見えるとおりに画面に写すものでもなく、見えるものを見えるとおりに、また見たとおりに、見えたとおりの感じを表現するものだけでない。パウル・クレエの創作信条は「芸術は見えるものをそのまま再現するのではなく、見えるようにすること」であり、私たちの目には見えないものをも、見えるように表現することであった。……

画家は絵でしか表現出来ないからこそ絵を描くのであり、その他のなにものを持ってしても表現出来ないから、画家は色と形を美術の言葉として表現する。美術は色と形と素材の材質を言葉として表現する造形活動である。パウル・クレエの表現世界はまさに、色と形と素材を言葉として造形思考し、造形文法によって組み立てられた造形表現である。

『彼がつくった不思議な気候に棲む人は、そして愛らしいけどもの達は、滑稽な音楽に打興じています。時には、皮肉な笑顔さえ聞こえてくるようです。その一音一音は美しく、ニュアンスに富んでいます。震えているような線は、しかし素晴らしいフーガに何時しか変わります。クレエの作品は、音楽が人を魅するのに似た、魔力があるように思われます。

私は音に色彩がするように、色の中にも音が潜んでいるものと思っています。』

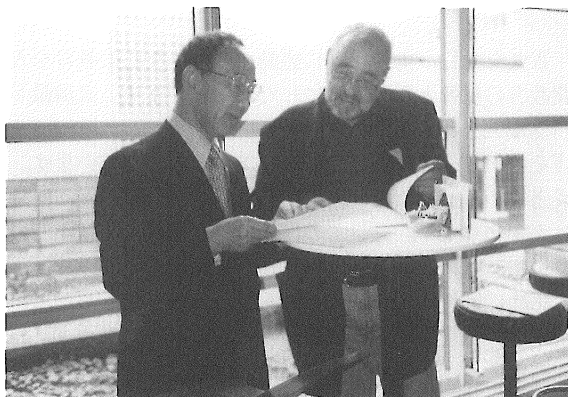
『クレエは作品の中で、つつましくやかに音楽と絵画を結びつけたようです。

クレエと音楽的素質については、多くの傳記が語っています。』

『しかし私はクレエがいわゆる音楽的な画家であった

とは思いません。なぜなら彼は、視覚にも、触覚にも、同じ本能的な感受性を表しているからです。

クレエの作品を見ていると、私の音楽的本能がつよく揺り動かされるのを感じます。しかしそれは、彼のあまりにも絵画的な絵画を通して、私の中の何ものかに訴えるのです。私は、クレエの絵画が好きなのです。』



アレキサンダー・クレエ氏とベルン美術館にて

そして、パウル・クレエが度々、ドイツのパウハウスで講義したように美術作品は、カオスのような混沌とした拡がりの中に、数学にも似た宇宙的なロジックがあります。規則でない規則のように思えます。武満徹が語るように『音楽には、数学にも似た宇宙的なロジックがあります。これは、概念とはちがったものです。クレエの絵画には、この意味での音楽的な必然性がリズムをもって、たえず動いていて、それが彼の幻想や神秘的な念に、美しい秩序を与えているのではないのでしょうか。』

昨年の秋、ベルン美術館で再会したパウル・クレエの孫・アレキサンダー・クレエ氏にベルン美術館のパウル・クレエ作品を案内していただきながらベルン美術館所蔵の「空間にて」をベルン美術館でともに観た。

作品を前にクレエ・プリミティブについての考察について饒舌に語るアレキサンダー・クレエ氏に出会って、特にこれはお気に入りの作品のように見えた。多くの日本人が、そして武満徹が語るように『クレエの作品を見ていると、私の音楽的本能がつよく揺り動かされるのを感じます。しかしそれは、彼のあまりにも絵画的な絵画を通して、私の中の何ものかに訴えるのです。私は、クレエの「絵画」が好きなのです。』

「空間にて」をベルン美術館で見るとパウル・クレエがパウハウスで語ったようにパースペクティブの基礎を自由に展開した変則的な投影が音楽として聴こえてきます。

『寡黙な彼が、羞みながら語りかける一言には、何か底深い意味が隠されているに違いありません。AD MAR-GINEMの日没時。クレエは静かに、微笑しながら明日を予言する作家です。(たけみつ・とおる作曲家)』

Ⅳ. 終わりに

音楽を愛し、美術作品に感動する豊かな心の教育を人間教育の根幹として大切にしたいと思います。武満徹がパウル・クレエをたたえたように。

『その一音一音は美しく、ニュアンスに富んでいます。震えているような線は、しかし素晴らしいフーガに何時しか変わります。クレエの作品は、音楽が人を魅するのに似た、魔力があるように思われます。』

感性に触れ、響く、美しいもの。それが私たちが求め続けている空間です。武満徹のクレエ論「パウル・クレエと音楽」は、深い思索に満ちた記述です。今日のように原色の画集の極めて少ない時代にあって、パウル・クレエ絵画の真髄に迫る考察と若き日の武満徹感性の拡がりに敬服します。

本稿では、その深さと洞察に到底いきませんがパウル・クレエ研究の継続に新しい視野を持つことが出来たように思います。

参考文献・資料

- * 武満徹のクレエ論「パウル・クレエと音楽」月刊誌「アトリエ」1951年・昭和26年6月号・p.20-22 (p.22-22はクレエの絵の図版。東京芸術大学附属図書館)
- * Paul Klee Das bildnerische Denken / Herausgegeben und bearbeitet von Jurg Spiller / Schwabe & Co. Verlag Basel / Stuttgart
- * Paul Klee Notebooks Volumel The thinking eye Edted by Jurg Spiller / Translated by Ralph Mannheim / Lund Humphries, London / First English edition 1961
- * 造形思考(上) パウル・クレエ / 土方定一・菊盛英夫・坂崎乙郎共訳 / 新潮社1973
- * 対談「クレエの音楽から享けるもの」滝口修造(美術評論家), 駒井哲郎(版画家) 武満徹(聞く人) p.22~42, 月刊誌「美術手帳」特集パウル・クレエ, 1959年 / 昭和34年1月号
- * 「音, 沈黙と測りあえるほどに」武満徹著・新潮社・1971年10月20日 / 第一エッセイ集
- * 「樹の鏡, 草原の鏡」武満徹著・新潮社・19年10月20日 / 第二エッセイ集
- * 「音楽の余白から」武満徹著・新潮社・19年10月20日 / 第三エッセイ集
- * 「遠い呼び声の彼方へ」武満徹著・新潮社・11年10月20日 / 音楽論, 小説など
- * 「時間の園丁」武満徹著・新潮社・19年10月20日 / 最後のエッセイ集 / 没後刊行
- * 「音楽」小澤征爾・武満徹著・新潮社・19年10月20日 / 対談 / 新潮文庫
- * 武満徹・音の河のゆくえ」長木誠司+樋口隆一編・平凡社・2000年3月20日
- * 「武満徹著作集」全5巻・編纂委員 / 谷川俊太郎 / 船山隆・新潮社・2000年2月~
- * 武満徹著作集5・193~195頁・新潮社2000・7・10
- * 「美術史小論集」一研究者の足跡, 中村二柄著・一穂社・1999年10月20日
- * 対談「武満徹と言葉」坂上弘, 船山隆武満徹 p.52~57, 月刊誌「波」2000年 / 平成12年2月号
- * 「武満徹・ピアノ作品集」ピーター・ゼルキン / CD: RCA-BVCC-1508 ; 「夢の庭」ラファエル・モステル / 訳・木幡一誠 ; 特別インタビュー「ゼルキン, 武満徹を語る」渡辺和
- * 「武満徹・ジェモー / 他若杉弘指揮・東京都交響楽団 / CD: DENON-COCO-78944
- * 「石川セリ / 翼」武満徹・ポップ・ソングス / CD: DENON」COCY-78624
- * 絵画と音楽」E・ロックスパイザー著 / 中村正明 訳・白水社・1998年
- * 河添達也作曲「バラタクシス」山陰フィルハーモニー管絃楽団創立25周年委嘱作品として初演・第27回山陰フィルハーモニー管絃楽団定期演奏会 / 2000年 / 平成12年2月27日 / 松江市総合文化センター・プラバホール
- * 「カメラの前のモノログ / 植谷雄高・猪熊弦一郎・武満徹」マリオ・A / 集英社新書0031F・2000年6月
- * 現代世界の美術13クレエ・編集委員・中山公男・東野芳明・大岡信 / 責任編集千束伸行 / 執筆者千束伸行・浅田彰・集英社
- * クレー / 新潮美術文庫50・1985・新潮社
- * 『子どものためのパウル・クレエ展』浜田市世界こども美術館序供の領分」監修アレクサンダー・クレエ・編集 日本パウル・クレエ協会・発行浜田市世界こども美術館制作・印象社
- * 『子どものためのパウル・クレエ展』ニューオオタニ美術館展

- *「クレーの絵本」谷川俊太郎・1995年，講談社刊
- *「こどもたちのためのパウル・クレー展」に寄せて
山陰中央新報／平成9年1月8日。
- *「パウル・クレー美術館に期待」石野眞・中国新聞社
・夕刊コラム「でるた」／平成12年6月15日。
- *大岡信「世界の中の日本詩歌－ハーン生誕150周年に
思う－」松江国際文化協会創立10周年記念文化講演
会／平成12年9月15日・島根県立県民会館